

# 知求会ニュース

2008年09月

第27号

## ◎ 国際学研究科発足10周年および多文化公共圏センター設立記念

### 国際シンポジウム「グローバリゼーションと多文化共生の展望」開催案内

宇都宮大学国際学部によって今年4月に多文化公共圏センターが設立されました。このセンターはグローバル化に伴う様々な課題を地球規模で考えるとともに、地域連携・地域貢献を通して実践的に解決することを目的に設立されました。その記念として、国際シンポジウムが下記の日程で開催されます。

日時：10月29日(水) 10:30～ 場所：宇都宮大学多目的ホール

第一部：基調講演 10:30～12:00

スリチャイ・ワンゲオ教授/タイ：チュラロンコン大学

アンネッテ・トライベル・イリアン教授/ドイツ：カールス・ルーエ教育大学

第二部：基調講演を踏まえてのパネルディスカッション 13:30～17:00

司会 **スエヨシ・アナ**(宇都宮大学国際学部講師) パネラーとして学内外研究者数名を予定  
問い合わせ先：宇都宮大学国際学部 多文化公共圏センター (担当：矢部)

電話：028-649-5228 電子メール：tabunka-c@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

ホームページ：http://mpic.utsunomiya-u.ac.jp

## ◎ 宇都宮大学大学院国際学研究科公開授業の案内

国際学研究科では、ひろく県民の方々を対象に、「アカデミズムへの誘い—先端的人文社会科学とは何か?—」を公開授業として、以下の内容で宇都宮大学国際学部 **E棟1階1151教室**にて開催されます。申し込み方法は、「公開授業参加希望」と明記し、住所・氏名・連絡先電話番号をご記入の上、「往復はがき」または「電子メール」にて、お申込み下さい。申込み先は、〒321-8505 宇都宮市峰町350 宇都宮大学国際学部総務係または Email:koksomu@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp です。

### 公開授業科目 **国際学総合研究B「地域社会と現代II」**

第1回 10月04日(土) 午後2時から4時 **内山 雅生** 教授

「変貌する現代中国社会と日本の中国研究」

第2回 10月11日(土) 午後2時から4時 **阪本公美子** 准教授

「アフリカ・モラル・エコノミーによる経済停滞と内発的發展  
—グローバル化の波の中で—」

第3回 10月18日(土) 午後2時から4時 **岡田 三郎** 教授

「研究のさまざまな視点：岡倉天心『茶の本』」

- 第4回 10月25日(土) 午後2時から4時 **丁 貴連** 教授  
「媒介者としての日本文学・日本文化  
—ヨーロッパから日本、そして韓国—」
- 第5回 11月01日(土) 午後2時から4時 **松尾 昌樹** 准教授  
「中東地域の歴史と国民統合」
- 第6回 11月08日(土) 午後2時から4時 **岡本 義輝** 氏 / **北島 滋** 教授  
「①定年後、60才で宇大大学院国際学研究科に入学！」  
「②市民レベルの国際交流と社会学—本講座のまとめ」

### ◎ 国際学部だより

国際学部では、開倫塾提供講座として国際学部専門科目「国際学特殊講義Ⅰ(国際政治と日本)」が県民の皆様には開放されています。講義を担当して下さる**神長善次**国際学部客員教授は、栃木県出身の外交官で、アジア、中近東の大使を歴任された方です。

授業期間および授業内容

- 第1日 8月06日(水) 8:50~10:20 10:30~12:00 国際政治概論  
12:50~14:20 欧州政治の基礎
- 第2日 8月07日(木) 8:50~10:20 欧州政治の基礎  
10:30~12:00 12:50~14:20 アメリカ政治の基礎
- 第3日 8月08日(金) 8:50~10:20 10:30~12:00 アジア政治の基礎  
12:50~14:20 文明概論
- 第4日 9月25日(木) 8:50~10:20 文明概論  
10:30~12:00 日本文明の基礎  
12:50~14:20 日本文明の国際比較
- 第5日 9月26日(金) 8:50~10:20 演習—仮題:アメリカ大統領選挙(と日本)  
10:30~12:00 演習—仮題:オリンピック後の中国(と日本)

国際キャリア合宿セミナー2008が9月20日(土)から22日(月)まで、栃木県青年会館(コンセーレ)にて開催されます。講義講師と担当分野は以下の通りです。

国際イベントクリエイター (株)博報堂ディレクター	中野 民夫 氏
異文化間コミュニケーター (社)日本観光通訳協会理事	高宮 暖子 氏
ソーシャルビジネス フェアトレードカンパニー(株)	高須 花子 氏
国際青年ボランティア 白鷗大学教授(青年海外協力隊技術顧問)	結城 史隆 氏
国際協力 NGO 宇都宮大学教授(オックスファム・ジャパン)	<b>重田 康博</b> 氏
国際公務員・フィールドリサーチャー 宇都宮大学准教授 (前ユニセフ・UNDP)	<b>阪本 公美子</b> 氏

国際ヘルスワーカー 国際医療福祉大学講師 石井 博之 氏  
農と環境の国際協力 宇都宮大学准教授(NPO 法人エコビリティ) 平井 英明 氏

**研究室訪問 18** 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第18回目には、留学生センター所属の威 傑先生にお願いしました。  
(原稿受理 8月25日)

## 「研究室案内 威研究室」

威 傑 (Jie Qi)

宇都宮大学留学生センターに赴任して6年の月日が経っている。留学生センターで開講する留学生向けの日本語授業のほかに、「Methodologies of English Dissertation Writing」等の大学院の授業も担当している。国際学研究科では、4年前から「多文化教育論」を受け持っている。

これまでの研究は、「外国語教育」と「教育社会学」の二つに大別される。大学での専攻分野は日本語・日本語教育で、24年前から中国の大学に助手として任用された時からずっと研究興味をもったのは外国語教育と社会文化との関係であった。また、日本語教育に関しては、おもに教授法および教師論についての研究を続けてきており、今日に至っている。「教育社会学」に関する研究を始めたきっかけは、15年ほど前に日本の学校で外国人生徒を対象とするカウンセリングの仕事であった。その後、渡米してこの研究を新たにスタートさせ、今日まで継続してきている。以下、近年発表した主な著書・研究論文の概要を示して私の研究紹介とさせていただく。

1. Qi, J. (2003). 「Educational Reform in Contemporary Japan: Individualization and Internationalization?」『宇都宮大学国際学部研究論集』No. 15, pp. 159-171.

本論文では、戦後日本の学校教育、教育改革について日本人論と関連付けて分析を試みた。まず戦後日本の教育システムにおける権力構造が移り変わる過程を辿り、「理想的な日本人像」は学校教育のカリキュラムにどのように組み込まれたかについて論じた。つぎに、「理想的な日本人像」とそれに付随する「理想的な生徒像」は、多種多様な力による相互作用の結果として形成され揺れ動く過程を分析した。最後に、80年代以後の教育改革で「理想的な日本人像」の揺れが一層振幅を増し、より流動的になったこと、その結果、かえって反「個性化」、反「国際化」の生まれる余地が与えられたことを指摘した。

2. Qi, J. (2004). 「Theoretical Perspectives on History and Power: Marx, Gramsci and Foucault」『宇都宮大学国際学部研究論集』No. 18, pp. 121-136.

本論文では、カール・マルクス、アントニオ・グラムシーおよびミシェル・フーコの歴史観、権力観および真理観について比較検討を試みた。まず、マルクスの進化論的・必

然論的歴史観に対し、フーコの歴史観は概念の歴史であった。次に、マルクスの権力観はイデオロギー的なものであるが、グラームシーはヘゲモニー理論を提唱した。一方、フーコは権力メカニズムが多様化すると主張した。最後に、マルクスは「真理」の普遍性を主張したのに対し、グラームシーは「真理」を用いて大衆への「エムパワーメント」を提唱した。フーコは「真理」には普遍性がないと論じた。

3. Qi, J. (2004). 「The Power Struggle: Marxian/Gramscian Educators versus Foucaultian Educators」 宇都宮大学国際学部編『移動・都市・翻訳』（国際学叢書），pp.209-232.

本研究は、欧米および日本におけるマルクス主義教育論者とポストモダンニズム教育論者の異なった教育観について比較分析した。マルクス主義教育論者は教育が万能であり、教育の力で不平等な社会を改革すると主張するのに対し、ポストモダンニズム教育論者は教育がその時々々の社会、政治と経済に影響され、教育は思考方法を形成するものとしている。両者の異なった教育観から、異なった教師論、生徒論、カリキュラムデザイン法、教授法、生徒指導法等が生まれたといえる。

4. Qi, J. & K. Yoshida (2005). 「The Reasoning of “Successful” Japanese Language Teachers and Learners」 『宇都宮大学留学生センター年報』 No.1, pp. 48-56.

本研究は、日本における外国人を対象とする日本語教育の現状を歴史的・文化的な視点から分析し、いわゆる理想の日本語教師像および日本語学習者像についての検討を試みたものである。結論から言えば、理想とされる日本語教師像は、単に日本語を教授することだけでなく、日本の歴史、文化、価値観、考え方等をも学習者に伝授する者のことであり、理想的な日本語学習者は、単に言葉の習得を達成した者であるだけでなく、自分自身を「日本化」し、よりよく日本を理解する者のことである。

5. Qi, J. (2005). 「A History of the Present on Chinese Intellectuals: Confucianism and Pragmatism」 T. Popkewitz 編『 Inventing the Modern Self and John Dewey: Modernities and the Traveling of Pragmatism in Education』, 米国 Palgrave Macmillan 出版社, pp. 255-277.

本書は、アメリカの教育者で思想家であるジョン・デューイが提唱した実用主義が各国の近代化プロセスに与えた影響に関する検討を通して「知」の伝播プロセスの解明を試みたものである。著者が担当したのは、デューイの実用主義が儒教文化を背景に持つ中国知識人と中国社会に与えた影響を、「新文化運動」を機に始まった文化改革、教育改革と文字改革を通して検証した部分である。

6. Qi, J. (2006). 「The System of Reasoning the Child in Contemporary Japan」 M. Bloch

等編『The Child in the World/the World in the Child: Education And the Configuration of a Universal, Modern, And Globalized Childhood (Critical Cultural Studies of Childhood)』, 米国 Palgrave Macmillan 出版社, pp. 143-156.

本書は、グローバル化・ボーダレス化が進む世界で、異なる社会文化背景における幼児教育に関する理論や実践の相違について検証した。著者が担当した第七章では、日本の社会制度や文化が如何に日本人の幼児教育観を規定し、社会の変化に伴う幼児教育観の変遷過程を辿りながら、幼児教育観の形成に影響を及ぼした要因とその背後にある権力構造について分析を試みた。

7. Qi, J. (2006). 「Social Reconstruction and Contemporary Japanese Educational Reform」 陳麗華編『社会重建過程の理念與実践：覚醒、増能與行動台湾』五南圖書出版股份有限公司, pp. 193-216.

本研究は、近年の日本の学校カリキュラム改革について分析を行った。日本の学校教育が如何に日本の政治、経済および社会の変化に答えようとしているか、また、教育改革による社会変革の試みにも触れ、日本の教育改革の経験と教訓を中心に分析し、このような改革を可能にした社会、経済および政治的背景について探究を試みた。

8. Qi, J. & S.P. Zhang (2008). 「The Issue of Diversity and Multiculturalism in Japan」 『2008 Annual Meeting of the American Educational Research Association 電子出版』, pp. 1-16.

経済のグローバル化が進むにつれ、日本でも多文化主義に関する議論が盛んになってきている。本研究は、日本のグローバル化と多文化主義について考察した。とくに、「多様性」と「同一性」という、相反する考えを巡る議論から、日本的「多文化主義」の特徴を見た。その分析結果を踏まえて、日本社会がより開かれた多文化共存社会へと変貌していく可能性およびそのために必要な対策等についてさらに検討を加えた。

**博士録 04** 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 4 回目には、今春お茶ノ水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 博士後期課程を修了した、**李 尚珍** (国際文化研究専攻・第 1 期生)さんにお願ひしました。執筆者の都合により、掲載を次回に延期します。(連絡受理 8 月 26 日)

**知究人 08** 第 9 号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(**ちきゅうびと**)を設けました。第 27 号の第 8 回目は、京都大学大学院に進学されている柏瀬研究室 OG の高安真理子さんです。(原稿受理 8 月 25 日)

## 「大学院に進学して」

## 高安 真理子

国際学部国際文化学科 13 期生の高安です。宇都宮大学を卒業した後、京都大学大学院に進み、人間・環境学研究科で語学教育、特に英語教育の研究をしています。2007 年に修士課程を修了し、現在は博士課程の 2 回生になります。

今回「知求会ニュース」に投稿する機会をいただいたので、私が宇都宮大学で学んだことと、京都大学大学院での近況をご報告させていただこうと思います。

私が大学院に進学しようとしたのは、宇都宮大学在学時代に得た経験が大きく影響しています。国際文化学科では、多岐にわたる分野に触れることができたことで、自分自身の興味や関心の幅が広がりました。また海外へ留学に行く人が多く、私も周りの行動力に影響され、夏季休暇や春季休暇を利用してカナダへ短期留学をしました。そこで出会った「イマージョン教育」という言語教育法に関心を持ち、卒業論文のテーマにも選びました。

卒論執筆のための研究を進めていくうちに、さらなる研究への意欲が強まり、大学院へ進学することにしました。

大学院に入った直後は、学部の頃と雰囲気がいかに違ってくることに戸惑い、馴染むのに少し時間がかかりました。今になって考えると、特にプレゼンテーションについての知識と、指導法の違いに関する情報があれば良かったように思います。

大学院では授業や研究会など、プレゼンテーションの機会が多く、修士 1 回生の頃は常にその準備に追われていました。楽ではない課題でしたが、院生仲間たちと意見交換をしていく中で、どうすれば他者に分かりやすく発表内容を伝えればいいのか学ぶことができました。さらに良いプレゼンテーションを目指すうちに、それを聞く際の心構えや、文献の読み方とまとめ方も良くなっていったように思います。大学院では研究内容そのものを深めていけるように、研究方法やプレゼンテーションの方法は、学部生のうちにしっかり身につけておくのが良いと思います。

また研究室の指導体制については、大学や分野ごとでも異なりますが、何より指導教官によって変わってきます。私は宇都宮大学では柏瀬省吾先生に手厚いご指導をいただくことができました。現在所属している研究室では、指導教官が個々の学生に対して指導するのではなく、学生は自分の研究を自分の責任の中で進めていきます。つまり研究内容も進め方もそれぞれの学生の判断に委ねられています。これは学部と大学院の違いということもあるでしょう。大学院からは 1 人の研究者として自立していかななくてはならないからです。他には大学院でも研究室によっては研究テーマを指導教官から指定される場合もあります。個々の学生がばらばらに研究をするのではなく、研究室としてのテーマを分担して結果を積み重ねていくためです。実際に私も自分の研究とは別に、高大連携プロジェクトにも参加させてもらったり、中国語教材作成のプロジェクトにも携わったりしています。

宇都宮大学では、自分の興味のあることを自由に研究させてもらいました。今でも卒論を書いていた頃の意欲や自信を持っていたことを思い起こし、自分を鼓舞することがあります。何より当時抱いた研究への動機が今でも原動力となっています。

## NEW

**海外だより 01** 第 27 号から、国際学部・国際学研究科の出身を問わず、海外に帰国された留学生およびご結婚やお仕事で海外に在住する同窓生に、現地の様子を案内していただくコーナーを設けました。第 1 回目は、昨年ご結婚で泰国・サムットプラカーン県に在住された**大畑 美優紀**(国際社会研究専攻・第 1 期生)さんにお願ひしました。(原稿受理 8 月 25 日)

### 「サワッディーカ！」

大畑 美優紀

サワッディーカ！皆さん、ご無沙汰しています。皆さんお元気ですか？一期生の大畑美優紀です。昨年、タイ人の主人との結婚を機に 30 年過ごした栃木を離れ、現在タイで暮らしています。お陰様で主人と 2 人毎日楽しく過ごしています。

主人の仕事の関係上、今はバンコクの東に隣接するサムットプラカーン県に住んでいます。家はちょうどチャオプラヤー川の河口近くにあるため、タイ湾からチャオプラヤー川に入港する世界各国の貨物船や石油タンカーが行き交う光景が見られます。通勤時には船に乗って対岸に渡ります。海なし県 の山里で育った私にとって、この土地はまだ非常に違和感のある地ですが、反面、物珍しさにわくわくする場所でもあります。

昨年来タイしてすぐに日系企業に就職しました。現在は日本人駐在員の生活サポートを主に担当しています。この会社では 150 人近い日本人駐在員が働いているため、問い合わせや苦情は三者三様。日本人の多い職場の上に、仕事の内容も日本人関連ですのでタイにいるような気もしないくらいです。

平日は仕事中心の平凡な生活ですが、年末年始、タイ正月と長期休暇があると、主人の実家のあるプーケット県へ向けて 900 キロ車を走らせます。プーケットは皆さんもご存知の通り有名な観光地。山も海もある自然豊かなところです。しかし、プーケットに行ったからといってリゾート気分を味わうなんてことはほとんどありません。なんせ私は一応嫁ですから。まあ、周りは外国人の嫁である私に特に何を期待する様子もないのですが(笑)。そんな私は、実家で執り行う儀式や行事に積極的に参加しています。主人の家系は華僑ですので、仏教寺院への参拝はもちろん、中国寺院への参拝、中国正月で神を奉る行事、霊媒師を訪ねてご先祖様の話を聞くなど、興味深い習慣がたくさんあります。プーケットには南タイ文化に、華僑文化、タイ文化そしてプーケット独自の風習が混ざり合った不思議な文化があるように思います。これについては、私も少しずつ勉強をしていこうと思っています。いずれ後生に伝えていかなければならない大切な習慣ですからね。

タイでの 1 年間を振り返りますと、生活や仕事に慣れることが最優先であったように思います。2 年目の目標は、受身な自分を捨てること。それから、自分が信念を持って取り組める何かを少しずつ始めていくこと。つい先日のお盆休みに 1 年ぶりに実家に戻り、気持ち新たにタイに戻ってくることができました。もっとタイでの生活を楽しんで、皆さん

にタイの様子を少しでも多く報告できたらいいなと思います。

日本で応援してくれている家族、恩師や友人たち、そして主人に主人の家族、思えば私は多くの人達に支えられてここまで来ました。今すぐに何かができるわけではないけれど、今ここで元気に生きていることに感謝し、まずは今自分が置かれている状況で最善を尽くせるように日々歩んでいきたいと思います。

ではみなさん、チョコレート・ナ・カ（お元気で）！是非タイに遊びに来てくださいね。お待ちしております！

**フォーラム** 第4号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。2008年の長月を迎えて、皆様忙しいことと思います。（原稿集めに苦勞しています。）今回は、予定していた執筆者からの投稿がありませんでしたので、休載とします。

#### 重要

#### ◎ 「宇都宮大学基金」への寄付申込のお願い

4月16日付けの公式文書により、菅野長右エ門・宇都宮大学長から国際学研究科同窓会宛へ、正式に「宇都宮大学基金」に対する寄付申込の協力要請がありました。

この「宇都宮大学基金」の目的は、近年の国からの交付金減額に対する財政基盤を補完するものです。また、少子化による大学間の競争が熾烈を極めてきている現実もあります。大学側からの寄付申込書に記された寄付目的に、6項目が挙げられています。①基金事業であれば何れでもよい。②学生等に対する支援のため。③外国人留学生に対する支援のため。④国際交流の支援のため。⑤教育研究活動等への助成のため。⑥キャンパス環境の整備・充実のため。この目的の中で、特に国際学部・国際学研究科が目的とすべきは、②③④が重点として考えられます。

国際学研究科のOBやOGには、他研究科に見られない大きな特徴があります。それは、留学生の存在の大きさです。国内に留まる同窓生、外国に戻る同窓生と多様性に富んでいることです。難しいことは自明ですが、ぜひ口コミで、同級生・先輩・後輩にネットワークの輪を広げて、「宇都宮大学基金」に対する協力の結果に、心意気を示したいものです。なお、設立趣旨の詳細や寄付の申込みなどについては、宇都宮大学HPの宇都宮大学基金をご覧ください。（<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/kikin/index.html>）

---

**編集後記**：限られた時間でのニュース発行、同窓生の皆様のご感想はいかがでしたか？ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。同窓会会員の皆様へのお願い：  
**住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。** [chikyukai@yahoogroups.jp](mailto:chikyukai@yahoogroups.jp)